

バリ島の家屋敷と場位観

——方位〔ke〕と場位〔di〕——

倉 田 勇

〔1〕

バリ島の中央高地には Agung 山 (3,142m) をはじめ、いくつかの高山があり、これをバリ島民たちは世界の中心と信じてきた。その中央高地の一角である G.Batur (1,717m) はいまでも白煙を吐き鳴動している。やや北東に偏した Batur 山をふちどる形に外輪山がとりまき、Batur 山腹を東に降りたところに細長く鏡をおく形に光ったカルデラ湖である Batur 湖が眺望される。この地域は Kintamani 高原といわれ雨が多く濃霧が出るとかすみ、晴れた月夜には青空に星が輝き、闇夜は外輪山が黒々と無気味に迫ってくるが、湖畔には人家の小さい灯が点在しこれは土地の人が「湖の星」とよぶ5つの村の灯であり、この村々は Buahān, Kedisan, Abang, Tērūnyān, Songān の名で知られている。

この地域を極めて短期間ながら筆者は1960年3～4月、ついで15年の歳月をへだてて1975年3月再び訪れた。この15年間に1963年3月17日と5月16日、バリ島の最高峰 Agung 山は再度大爆発し、噴き上った熔岩石は遠く Abang 山をこえて Batur 山外輪山麓内側の Abang 村まで達し災禍をもたらした。かくてこの村人たちは四散し現在ようやく小屋がけの仮住いに数戸が立ち戻ったにすぎないのが現状である。Agung 山と前後して噴火した Batur 山から流出した溶岩は山の西側に黒々とその跡をとどめているが、この山麓にはかつて Batur という村があったが1927年の噴火の際に移住した。だが残った pura (寺院) に村人は祭礼時に戻っている。かくてこの地域の村人の離散がみられるかと思うと湖畔の一角に湧出した温泉の周囲には1960年当時は開拓農家2軒であった土地に今は観光客を集めた warung (店) が出現し集落化の様相もみられる。かつては幽境の土地であったこの地域が Tērūnyān 村の谷間の風葬地を訪れる観光客の増加から全く荒廃し、以前は小舟 (dayung) に草を積んで漕ぎ渡った湖上には日・米のエンジンをつんだモーターボートが走り、聞けばこの湖一帯になんと60隻が保有されるとかで時代の波に洗われてか一部には観光乞食が出て昔の光いまいづこの感しきりである。

このようにしてパトール湖畔の村々は離散集合をくり返してきた。それで従来のオランダ人学者の試みた村落類型論⁽¹⁾は適用できない面がみうけられる。また Songān 村では村人の系統を示す pasek において同一村落でも pasek Gelgel は火葬、pasek Kayusēlam は土葬と埋葬方式に差異があり、火葬はバリ島平坦地の村々の Hindu-Jawa の方式が持ち込まれたものであり伝承に従えばこの村も離散後再編された村であることが察知できる。

さてかかる離散、移動をくりかえしてきた村々においてこそバリ島の村落形成上の基本が見

い出せると考えその拠り所を方位観の側面に求めて村落内の住居の pattern を考察し、同時に海岸部の平地や社会成層上部の複雑化した住居にも共通したものを考えて試論していくのが小稿の目的である。

〔2〕

わが国にあって中国からの影響にとらわれず民俗社会の方位を論じた最初は移川教授の「方位名称の民族移動並びに地形⁽²⁾」においてであった。同論考で台湾高砂族諸社会の方位名称が太陽、地形、風向、移動の要因から実証された。さらに白鳥（庫吉）の論考⁽³⁾にも方位考証の痕跡がみられた。

現代に通用する「東西南北」を考えると、東西を太陽の出現、日没などいわゆる天動説的感覚でとらえている生活においては一種の方位観が認められる。沖縄の人々は夕焼を不吉の現象とみるのもその一例である。この東西の方位でも太陽は一年を通じて出没の位置を変え夏至と冬至の太陽の軌道差は各地域（民俗社会）の“時の観念”の差をもたらしている。これは各文化の暦の差にもなっている⁽⁴⁾。

次に南北が民俗社会でどう見い出されるかといえば、これは固定したものでなく流動可変性をもった風によって方位が示される。「南北は特に非固定的で振幅が大きく村落毎に異なる。南北の一部は非空間的要因で変化する……⁽⁵⁾」とみると南北にも相当の幅が示され、季節風といわれるように民俗社会の時の推移（季節）を誘起している。したがって方位という形で関与した太陽と風が共に時間的な要因でもあることは民俗社会の研究において注目すべきことである⁽⁶⁾。

次に民俗社会にあって方位を知るに重要なものとして地形がある。『風位考資料』（柳田国男編）の序で岡田は「風位の名に分明なものは少なくない。前にのべた伊太利名の東風を「レバンテ」と云ふは矢張り「太陽の昇る」と云ふ向の意が含まれてゐて琉語の「アガリ」と似てゐる。北風を「トラモンタナ」と云ふと同じである。⁽⁷⁾」と述べている。かくて掴みどころのない風が吹きくる方向の具象物で示され、それで風位が名称化するのであってこの際地形や自然は見逃しえないものである⁽⁸⁾。地形が変わると湿風は乾風に変化する。だから民俗社会で、たとえ名称は同じでも意味の異った風になるから名称だけでみていくことは風の性質、民俗社会の意味を誤る結果となる。

さて、移川論文には民族移動とその故地をめぐる考察が示されているが沖縄において村落の移動とか移住した場合、まえの場所に向って遠隔地から拝む「お通し」は一つの民俗方位ということができよう。

ここで問題が1つ出てくる。同時的に方位観念の重複がみられることと通時的にみた場合の借用の点である。柳田国男は「屋敷の中でも乾の隅が怖い為、今でも鎮守を祀ったり、榎を植ゑたりなどしてゐる。良（うしとら）の輸入説なるに対して乾に対する国民的不安は日本人がそれ以前から自分で経験して知って居た事柄だったのである⁽⁹⁾」と考証している。方位を示

すことばが外部から入る場合もあればまた存在していたものが消えて逆に新しく入ったことばに意味が付与されることも当然考えられる。この柳田の示唆した側面は文学の領域であるがタマカゼの吹きくる方位につき「日本文学に於ける戌亥の隅の信仰¹⁰⁾」(三谷榮一)として結晶している。また三谷は方位感¹¹⁾なる用語を用いた点注目される。また柳田は「民居と墓地との方角関係、又盆の精霊様の来る道すち¹²⁾」と言及したが、かかるものが民俗社会では同一でないから現存民俗社会で吟味していく必要がでてくるのである。

昭和41年10月、第21回連合大会(長崎)で「沖縄の方位観：《北風》と《南風》その他(常見純一)」、「2つ」の方位観の実在性をめぐる考察(筆者)の二報告がなされた。沖縄本土各地をめぐる磁石を用いた調査から、常見は「沖縄の方位観の内、風向名、方向名の体系とそれに関する諸問題について指摘すれば…(中略)現在沖縄にみられる風向名の体系は、①気象台型、②十二支型、③四分型(東西南北)、④三分型(東南北)、⑤二分型(南北)に分類される。沖縄在来の体系は④と⑤である。…東西は南北と重複しうる別箇の観念である。方位は何れも扇状をなし、南北は特に非固定的で振巾が大きく、部落毎に異なる。方位観は屋敷や家屋のたたずまいを決定し、地域名小字名や宗教的な事象と関連している¹³⁾。」と報告し英文題名を“North wind” and “south wind” blowing from east and west—some aspects of the cosmology. とした。ここで問題とする方位は単なる風向名や方位名称の分布や区分ではない。そして名称の分析は直接に空間の意味づけにつながり精神生活と関連しているものである。さて、言葉には借用がありえても地形には借用はありえずここに地域差が具体的に示されてくる。風の性質は方位を占う感覚にむすびつき各地域独自の意味づけが生じてくる。また沖縄では、のぼる朝日と西に沈みゆく太陽とは占う感覚は異っている。ここに空間認識上方位の意味づけとして「方位観」が成立する。この方位観は中国からわが国に伝来した方位知識体系——これの一部は日本で伝承文化になった面もみられるが——ではなく各々の民俗社会の空間意識における意味を探究していくものである。

先に古野は「原始経済に於ける呪術・宗教的要素¹⁴⁾」の論考で、R.F.Fortuneの研究に触れ“top-side”“bottom side”(seawards)を引用しているがこれは注目すべきことである。さらに古野は台湾高砂族アミ族社会の事例を『原始文化の探求』(昭.17)で引いて「これらの祭具は家屋の特定の場所に置かねばならない。男子の祭具を置く場所と女子のそれとは截然として区別されている。…(南西)のツァツァラアン(tsatsaraan)にデワス・シナタラアンを置く。ここはツァラ(tsara)即ち動物の顎をパツァラアンなる懸木に納める神聖な場所であって、ここにマラタウ神がいると信じている。……(中略)男はマラタウ神の禮拜には西南即ちツァツァラアンに向ってなすが、女はタルポアンに向ってなすことなく、ドギ神がいると信じられている東に向ってするのである。¹⁵⁾」として“聖なる方位”を記述している。古野の指摘した“聖なる方位”はのち「台湾・アミ族の住居と方位観¹⁶⁾」(常見)としてさらに発展するのである。

民俗社会の方位(これを民俗方位¹⁷⁾と村武精一は用いた)は「東西南北」の外に、上下、高低、前後、左右、遠近、内外などの空間認識であってこれを把握することは人々の物の考え方、

行動様式を知る手がかりとなる。この方位は村の配置や家屋敷地の構成、家屋の配置、屋内の間取りを知る上で役立つものであり、これらが1つのまとまったコスモスを形成していることに気づくのである。

〔3〕

現在のインドネシア語で用いられている方位名称「東西南北」の方位概念や言語感覚はかつては存在しなかったことを考証したことがある。¹¹⁸ それではこの概念に代る方位感覚はどうであったかというと、かの Lekerkerker C. (1926) らが例証した地域語 (bahasa daerah) による指摘を重要なものとみたのである¹¹⁹。最近「ハルマヘラ島における民俗方位の構造」吉田集而 国立民族学博物館研究報告 vol.2-No.3 1977)において、民俗方位の実在が分析的に精密に論証された。ところでかかる民俗社会の方位の考証は、インドネシア地域においては H.Kern (1889) によってはじまっている¹²⁰。つまり、方位の一方を「海」他方を「内陸又は高地」とする言語感覚の在存をひろくマレイ・ポリネシア語族に認めたことは語誌の上で注目される指摘であった。

さらに歴史言語学者 Dempwolff O. はインドネシア祖語 (Ur-Indonesien) の設定による比較¹²¹を試みているが、ここに示された方位名称に加えての合田のフィリピンの「ボニトック・イゴロット族の方位観覚書」(社会人類学年報 vol.2 1976) が報告されている。これらで例証された民俗社会の方位とは、地球が球状であるという科学的概念とは無関係に地球上の表面において周囲の自然との関聯で培われた独自の空間認識であるといえよう。この場合の空間認識は民俗社会によって差異が出るから民俗文化や人々の意識を理解する手懸りとなるのである。さてここでこの民俗方位の事例をインドネシアのバリ島の事例から説明を試みることにする。

バリ島では各村々の方位は地形の高低に因んだ kaja ↔ kelod と、太陽の出没による kangin ↔ kauh (kangin は ke + angin (風) の意味が含まれている) の4つの方位の組み合わせで示されている。バリ島は中央高地が分水嶺として境目となり南北バリに二分されるが、この境目が山地であるから、南バリと北バリとでは kaja の方位と kelod の方位が逆転している。さらに kaja の方位は吉方、kēlod の方位は不吉な方位と意味づけられている。またこの kaja を“聖”、kelod を“俗”という聖俗観でとらえることに対して kaja も kelod も聖であるという批判が佐々木宏幹によってなされた¹²²、この批判は Swellengrebel J.L. の「kaja ↔ kelod の対置は水平的なものでなく垂直的 (verticaal) な概念¹²³」とした考え方、さらに Grader C.J. の示した uranisch (天界) ↔ chthonisch (地界) の想定¹²⁴を考慮する時佐々木の批判を肯定できる。

因みにバリ島の山間には大きな湖があり、肥沃さや豊饒をもたらす水の水源地となっている。この kaja の方位は幸いをもたらすとされている。kaja とは傾斜面の高い方であり、山麓から山に及ぶとさらに山頂から天に及ぶから kaja の方位を“天界”につないで考えるのである。この対称である kelod は水の流れゆく彼方であり、その先に海があり、海底から地下に到り魔性的な不吉な地界、下界があると考えられている。さればバリ島の海岸辺の行事は海や地下から

の悪魔の到来を防ぎ浄めのためと理解され一般にバリ人は亀や蛇という海底、地下と関連した動物を忌み嫌う傾向が見い出される²⁹。かかるバリ島民のもつ天界、地界の考え方がインドネシア各地で同じ形で見い出されるものではないが、Grader C.J.は〈図I〉のごとき uranisch (天界) chthonisch (地界) の二方観に基いた「バリ島古村における二分制」(Tweedeeling in het Oud-Balische Dorp 1937) を書いて次のごとく論じている。

「宇宙の二分の起源は大地の神々の範疇もしくは地界の力の存在に対して天界の神々の範疇の存在に示された超自然力により2つのグループが存在する。……現代の言葉の意味での天の領域は地理的自然として地平線上に確定できるがバリ人は本来それに気づいていない。人々は地理学的に方向づける必要を欠いている。人々は一種の呪術上の方向づけを知っている。常に神々の世界は天界地界の力を相互に対称させている。各々一方の方向に一定の線に沿うての影響が知られている。呪術的なこの線は超自然力の双方グループにしたがって相互に作用する正反対の存在である。かくして1つの均衡がもたらされている。バリ人はこの正反対の存在に強く関連づけて考え、事実上、これらの力の及ぶ線の方が知られ、また方向づけられ宇宙における均衡のとれた配置を決定する。天界の力の作用の始点は山々の頂にある。この影響は上から下への一方向に作用する。かくて地形上の斜面に沿うて下っていく。この下へおりののと反対の方向が kaja の方位である。……下の方へ流れる水の方角に向うのが klod の方位である。…… kaja-klod の線と kangin-kauh という太陽の出没の線によって長四辺形を想定できる。kangin の太陽の高く上ってくる要素は kaja の概念と結びつき複合体となる。同様に沈みゆく太陽の kauh の方向は、klod の image と同一視される。上記の4方位の対称は互に2つの類別が生ずる。kaja-kangin から中心に向う範囲が uranisch(天界)とされ、これに対して kaja-kauh と klod-kangin は混合した要素をもち neutralen (中間的存在)の性質であり、より高くより低く分類される。そして klod-kauh の範囲が chthonisch (地界)として〈図II〉がそれを示している。

図 I

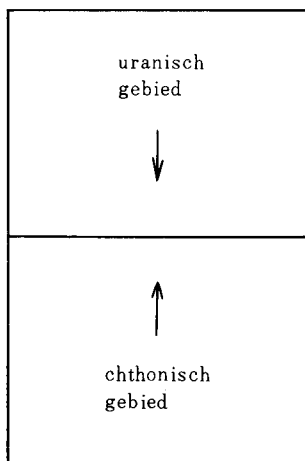
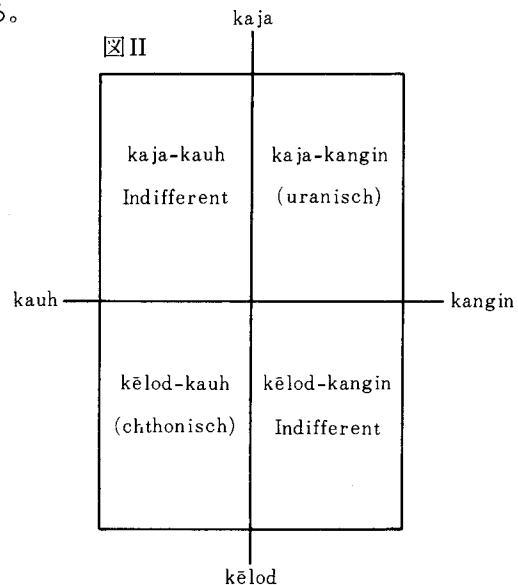


図 II

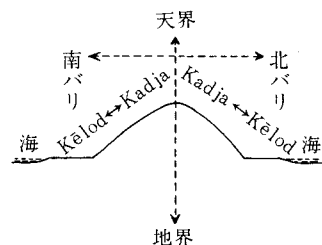


a) 神々の世界の二分の存在は2種類の神の崇拝をもたらし、一つは天界に、他は地界に方向づけられている。この各々は pabaktian kaluhur と pabaktian kadalam (kateben) とよばれている。同様に人々は寺院の形態にも2つの傾向を区別し、一つは天界への崇拝の場とし、他は下界への儀礼の供犠を捧げている天界の領域である kaja-kangin の隅の崇拝から呪力が生ずる方位とし、他方 klod-kauh には下界の力が強く支配している。kaja-kangin の寺院が上界に対するものと klod-kauh に pabaktian kadalem (pabaktian mulu klod) の寺院の位置が定まると、これらに対する形で居住村落が位置づけられる。かくて各種の寺院の位置づけの主要原則の形式である二分原理に基いた村落が形成される。また神々の座 (patin-ggih) が各寺院別々にあり、古くから慣習法 paruman's (sumanggen) による座席が割り当てられ、若干の古い村落の2つの balē agung 型式にも二分原理の影響が見い出され方位体系に基いていることが明らかである。

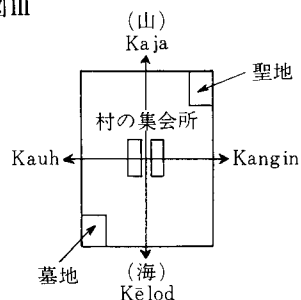
b) 居村、同じく古型の村落のたたづまいを示す平面図には一般的な原理の影響がみられる。古村は2分され集会の寺院 (pura bale agung) の主要原理は居村においても同じである。〈図III〉参照。村の起源の寺院や集会の寺院などは, dulu の位置から居村を顕著にしめ出し、多くの村でこれら寺院の前に住居の庭をつくることを禁じている²⁶⁾。

以上の記述に示したように Grader はバリ島の村落には、天界・地界の二分原理に基いて寺院が配置されこの原理が村構成の基本となっていると説くのである。かくてかかる村落内の寺院の所在をめぐる居村構成には民俗方位である kaja, kelod, kangin, kauh が決定的な基準として見い出されるのである。Grader によれば kaja ↔ kelod の対称は天界 ↔ 地界の二分に結びつくとし村落の場に概念的に uranisch ↔ chthonisch の領域を設定しているのである。

さて、kaja ↔ kelod の方位は kangin ↔ kauh の方位と共にいかなるバリ村落でも見い出されるものであるが、ところで kaja ↔ kelod は具体的にその村の所在する土地の高低であり村の存立する土地の斜面の上下であり、川があれば川上、川下という形で川の流れゆく水で決定されている。これはバリ島に限らず岡千曲の訳出したセラム島の事例²⁷⁾、合田涛の引用²⁸⁾、カリマンタン (ボルネオ) の rumah adat (long-house) の位置や墓石の据え方が川の流れと平行している²⁹⁾。しばしばインドネシアの古村の形が人体になぞられて説明されるが頭は川上という形になっている。ところでここで留意すべきは村々の立地条件における高い方の kaja が何で決定されているかということである。確かにバリ島では一番高い山である Gunung Agung が崇拝されている。しかしバリ島諸村落の kaja の方位は Gunung Agung に向けて一定しているのではなく村の立地する土地の直接の傾斜面の高い方に kaja の方位が定まっている。この傾向はイ



図III



インドネシア各地でも身近くの山、高地が判断の基準である。つまり村全体からみて土地の高低上下が村落領域内の事物、寺院の配置、居村の位置決定の要因となり、村人たちはその村の場において天界、地界の考えをもっているのである。かかる場の発生は各村のおかれた地形によって様々であることをバトール湖畔の村々において実証してみると、kaja は次のように様々であるが、kelod は湖の方位として示されてくるのである。

バリ島中央高地やや北東に位置したバングリ郡のバングリの町から輔装道路を上って penalokan に出ると視界は急展開し左手に活火山の Batur 山その右山裾にバトール湖が眺望される。外輪山上の道路は左折して Kintami の市場に向って上っていきが、この方位がこの penalokan の地点からみた kaja の方位である。さて、penalokan から湖畔に向って降りて1時間歩くと Kedisan 村近くにおり立つ。この Kedisan 村のある位置と平行して Buahan 村があるが、この2ヶ村の kaja の方位は直接いま降り下った斜面の方位であり湖の方位が kelod である。Kedisan 村附近の船着場である場所からみて湖に向って左手の湖岸にかけては Batur 村があった。村人は現在寺院を残して移住してしまったことは既述したがこの村でいうと Batur 山が kaja の方



位であり湖が kelod の方位であった。これは地図でいうと地理学上の西が kaja である。次に Songan 村は伝説ではもと村のあったのは kajusalam に pura puseh がある。この村の kaja の方位は北西に当たっていて村の家並は kaja ↔ kelod に並列して湖が kelod の方位である。対岸の Terunyan 村は逆に外輪山が南に迫っておりこれが kaja の方位であり、有名な谷間の二ヶ所の風葬地³⁰⁾の一つであるが、この墓地における死体の頭の方位は kaja に足は kelod である湖にして安置されている。湖畔の同じ側にある Abang 村は Terunyan 村と大体同じ方位をもっている。かくてこれらの湖畔の村の方位をまとめてみると、Kedisan, Buahon の村々は地理上の南に kaja が、Batur 村は西、Songan 村は北西 Terunyan, Abang の両村は東にそれぞれ kaja が方向づけられる。かくて図Ⅳの示すごとく「東西南北」に地形に応じて各村の kaja がそれぞれもたれており、逆に湖の方位が kelod として一致していてもしこの kelod を地理学上の概念で示せば、「東西南北」に kelod が設定されている。各村の立地条件から寺院の配置は先の図Ⅱで示した理念通りではないが原則は示されているし秩序づけられている。ここにおいて、バリ島の村々がいかに民俗社会の方位によって成立しているか、東西南北と言った概念でないかを明白に説明できたと考える。

〔 4 〕

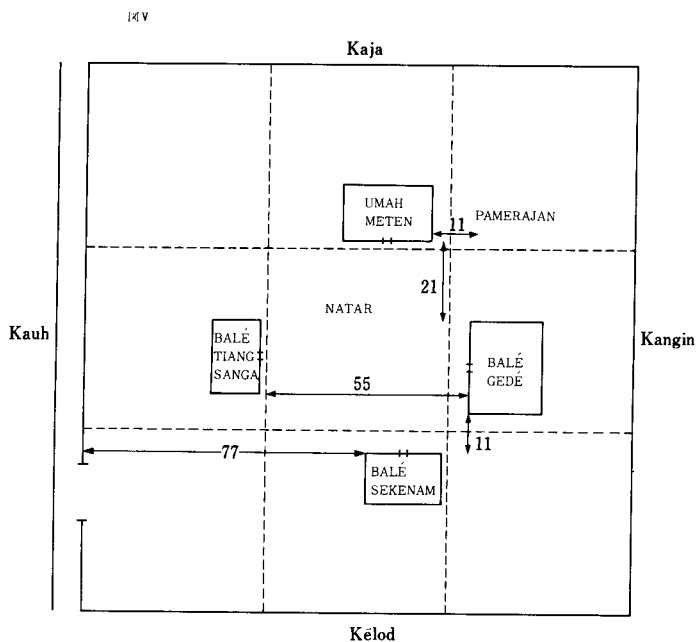
Songan 村に滞在中、筆者は村里から少し離れた高さ百米たらずの丘に登った。この丘から村は一望できるし、晴れば Batur 湖全体が眺望できる。この丘からふと足下を見下ろした時、そこに展開した家並が大体ではあるが kaja から kelod の方位に縦列していることに気づいた。古い型式の家並は umah (paon) と balē の間にちょうど通路になる形の庭をはさんで縦列しているのである。まだ村全体の実測図は作成できていないが村の中には新しい型のセメントを用いた建物 (gedong) が増えバリ島海岸部の村落にみられるように屋敷地 (pekarangan) 形式をとるものもあるが、大体この村は paon-natar (中庭) -balē のセットが認められ、これが kaja から kelod に列をなしている。つまり paon の側に隣家の paon がつづき、balē の下に隣家の balē が並びいづれの paon も balē も庭に向けて向い合いこの形は、Roger Y.D.T. が pekarangan 内の家屋は全部 natar (中庭) に向いて入口をつくるとした記述³¹⁾で指摘したごとくである。また Batur 湖対岸の Terunyan 村も家並は kaja-kelod に並ぶが kangin-kauh の方位に建てられた家が存在するのは狭いこの村の立地条件によるものであろう。Songan 村の人の語るところによると家屋は東に直面するのを忌むというのが、東つまり太陽の昇り来たる kangin の家向をとらない方式はインドネシアに多く見い出される。暑い直射日光を避け屋内を暗くし涼しくするのは熱帯の住居の基本条件と考えられる。現在道路条件からこれに面した家は假りに東から入っても、一種の「方違え」という方法を取り右折し南に歩いて左折してから家に入る方法がとられているのである。

さて次に実証するのは村内の事物の配置をめぐるの考察である。これまでに於いて、バリ島の民俗方位の实在をバトール湖畔の各村を例としてのべてきた。この地形に基いた kaja-kelod,

太陽の出没の方位 kangin-kauh は一村落領域内にあつてはどうであるかという、先に示した uranisch-chthonisch の二分が示される場においては方位というよりも、場位ともいべき位置づけ、つまり kangin → dangin, kauh → dauh, kelod → dlod という形に、あたかもインドネシア語の方向・方位を示す接辞 ke から位置、場所を示す接辞 di にて示される形で〈方位〉から〈場位〉を示すものが見い出せることである。またこの場の位置づけは屋敷地にも同じく見い出される。かくて位置や場所を示すことばが建物の名について所在を明確に示し、同時に方位におけると同じような空間の意味づけが生じているから方位観に対して“場位観”が設定できよう。つまり方位とはある位置からの一定の方向であり、場位とは一定の空間領域の位置であり場所を指しているのである。

村落レベルでみると方位に基いて事物は規制され配置され一つの民俗社会がコスモスとして成立している。この場合に民俗社会の建物名に場位を示すことばがつくのであり、また屋敷地レベルではこの屋敷地に建立される家屋は柱数で家屋の機能が定まり場位によって配置が決定している。例えば balē dangin とか balē dauh という場位を示す名称がつけられる。この屋敷地内に建造される建物の位置は建造する当事者（主人）の一定歩数で測られる。これを asta kosala-kosali という。asta とは肘の長さであつて人差指と親指ひろげた幅を asta mesti というし、人差指の長さを lai という。歩幅は tampak 〈tapak kaki(in.)〉 という。この歩幅で歩いた歩数が一定しており、その歩いた規定数のもたらすもので諸家屋の位置が決まる。さて図Vの示すごとく kaja-kangin に位置した sanggah kemulan の入口から11歩で balē sikepat そこから21歩で balē gēde, この balē gēde から kauh の方位に55歩で balē dauh が位置し balē gēde から11歩 kelod の方位に balē sekenam がありここから屋敷の入口までは77歩である。この歩数はいずれも奇数である。

これらの balē や paon はすべて中庭 (natar) に建物の入口が向いている。この natar は屋敷地の中央に位置し、あたかも1つの仕切れざる“部屋”のごとき場の機能を果たし行事もここで行われている。²²⁾ 屋敷地は子供によって相続されるがその順序は家族の状況によって長男が継承したり末子が受け継ぐのであるが、新しく家屋を建てる際にはその継承者の歩数で測られておりこれが先にふれた asta kosala-kosali であつてこの歩



数が狂うと狂人，病人が生じるとされ一定基準にかなった方法が家族繁栄の基礎とされている。寐所の床の長さも主人の脊丈に合わせて決めるが，これは主人の身長であって妻のそれではない。寐枕の位置は通常 Kaja の方位と定まっている。

バリ島でも平野部の方の屋敷地内の建物は複雑であり，とりわけ王宮など社会成層上部の住居は多くの機能をもった建物がみられ，平民にはその模倣を許さないのがみられた³³⁾。これに対して山間の僻地では極めて簡素な建物配置である。例えば東バリの Selaya 村などは寺院など全く小規模であるが，こうした僻地の住居に意外にもバリ島家屋の基本が見い出されるのではないかと考える。この考察方法は他のインドネシア各地の民俗社会の伝統的な家屋の研究に適用できると考えている。かかる見地から筆者はバリ島の住居の基本は umah (paon) 〈世帯，“私的”な場〉，balai (bale) 〈祭祀“公的”な場〉，加うるに natar (中庭) を基本に考えてみたい。筆者は庭を家屋と同列においていくもので庭も屋敷地全体からみるとあたかも 1 つの“部屋”のような存在であり中心となっている。

さて Songan 村でもかって M. Covarrubias が指摘したごとく「家は人体のように頭をもち，家祠 (kaja-kangin) がそれであり，寐所と balē は両腕であり，へそは natar (中庭) であり，性器は門，足は台所 (paon) と穀倉，肛門は裏庭の廃物を捨てる穴である³⁴⁾。」とした人体になぞられた事物配置がなされている。また頭，胴，足の三分形式で分ける傾向もある。さらに足の部分を尾 (ekor) とする説明も聞かれた。

次に Roger Y. D. T. は家屋敷地と道路の関係から入口の設定を考察した³⁵⁾。M. Covarrubias の指摘したように家屋敷地を人体にたとえれば家祠は頭であり門は性器であるとすれば，この両者が離れて位置するのは当然である。したがって kaja-kangin の隅から一番遠くに道路からの入口を設ける。このために道路から小道 (gang) をつくる方法もとられるのが一般であるが，図 VI は屋敷地を四辺形としての道路の位置と入口の関係を示している。この図に示された一番道路に近く位置 c. d. の場合，家祠の横に道路があって眼で見る距離では近いのであるが，c. d. の場合，道路から家祠までが一番“遠く”に位置したことになる。つまりこれは肉眼で見た距離とか実測距離では見出すことのできない精神世界での距離である。かかる精神的な距離や空間領域を確かめるべくここに試論したのである。

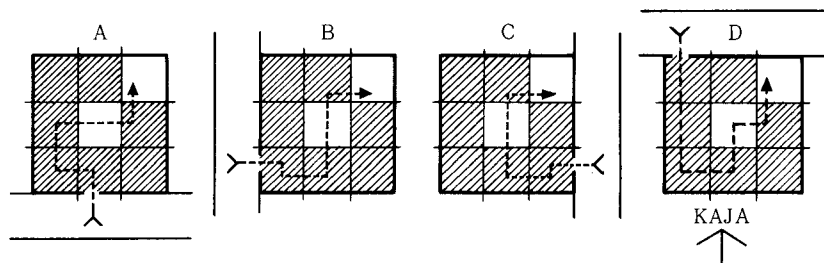


図 III この図は道路から中庭をへて聖所に歩いていく道程を示したもので，C，Dは道路に聖所は接していても，精神的な距離では離れてることになる。(Dr. Roger. Y. D. T. の作成した図に筆者が解説を付加した。)

〔5〕

人間のもつ文化は必ずしも合理的な科学的な判断のみでは把握できない部分がある。われわれにも太陽の出没など天動説に因んだ生活感覚をもつ一面がある。そこで小稿ではバリ島バトール山麓のバトール湖周辺の諸村落の村人たちのもつ方位観が地形に応じていかに多様に展開するかを実証してきた。かくて民俗社会の方位が土地の高低によりいかに独自性を示しているかを考察し、Grader 説により天界、地界の二元世界が村落社会にどう具現化するかを説明した。さて村の小高い丘に登ってふと見下ろした Songan 村の家並が kaja-kēlod の方位に整然と縦列したのを発見した時の昂奮もさることながら、日頃民俗社会の方位を口にしていて、うかつにも下着類を万国旗を吊した形に干し、木枝に靴下をさげおきしばらくしてパンツと靴下が Kēlod の方位に吊し変えられたのを知った時の失敗を思い出すのである。

次に、村落領域や家屋敷地の各レベルでは方位というよりも事物の位置や場位を示す形が見い出されることに注目して方位から場位の存在を指摘した。これは具体的に建物の名称として示されこの場合かかる場所においては方位に方位観が意味づけられるに因んで〈場位観〉が成立すると論じた。この場位には転換、置換の起る場合がみられるがここでは場位の存在の指摘にとどめた。

さらに、通例、バリ島の家屋は機能上から各部屋に相当するものが別々に独立した建物として屋敷地に分化して配置されている。この中央の庭 (natar) は重要な“部屋”のごとき存在である。また、この家屋配置の考察には王宮とか社会上層階級の複雑な家層配置よりも山間僻地の素朴な屋敷地の考察によってバリ島家屋の基本が把握できるとして umah (paon) — natar — balai の三分したものを抽出した。この家屋の配置を決定するには住む当事者の歩幅の一定歩数 asta kosala kosali という慣習的基準があった。これにより各家屋敷地の様相が多少異っているわけである。

現代の常識では羅針盤で精密に point を決める位置づけを科学的と考えている。だが人間の文化の理解においては筆者の採った手法はあまのじゃくかもしれないが、文化の独自性や個性の存在に気づくとき、異なる文化の理解のためにその文化のもつ基準や尺度の意味の探求が必要であり、小稿は不十分ながらもそれを意図して試論したのである。

注

- (1) Hindu-Bali の村を古村 (Bali Aga) として、Hindu-Java の封建制度の影響のあった村を新村 (Bali Mula) とした類型論 (V. E. Korn : Het adatrecht van Bali. p.p. 63-64 1932)。この類型論不可能の指摘 (C. Geertz. A. A. vol. 61-No. 6 1950) もなされている。
- (2) 移川子之蔵…同論文は (安藤教授環曆祝賀記念論文集, 1940) に所改。
- (3) 白鳥庫吉「日本語の系統一特に数詞について」(東洋思潮) 岩波講座, 昭. 11年。
- (4) この指摘は「“2つ”の方位観の実在性をめぐる考察(=)」(筆者) 第22回連合大会報告 (於南山大学) 昭. 42年。
- (5) 常見純一「沖繩の方位観: 《北風》と《南風》その他」第21回連合大会報告 (於長崎大学) 昭. 41年。
- (6) 小川尚義「時に関する高砂族の語」『民族学研究』(第5巻1号) 1939

- (7) 柳田国男編『風位考資料』3～4頁。
- (8) 移川前掲論文の地形の重視。
- (9) 柳田編前掲書 58頁。
- (10) 三谷榮一『日本文学の民俗学的研究』所収。有精堂。昭.47年4版。
- (11) 三谷上掲書。111頁 古代の方位感など。
- (12) 柳田編前掲書 61頁。
- (13) 常見, 上記報告。
- (14) 古野清人『原始文化の探究』119～122頁 昭.17年。
- (15) 古野清人『宗教社会学』河出書房 208～209頁 (R.F.Fortune; Sorcerers of Dobu, 2nd.ed, pp. 109～110 1963)
- (16) 常見純一「台湾・アミ族の住居と方位観」『都市住宅7110』所収。1971-10 同しく『住まいの原型II』鹿島出版会 昭.48年。
- (17) 村武精一 朝日新聞学芸欄研究ノート昭和46年7月27日
- (18) 「民俗方位」の一考察(倉田) 天理大学学报 82輯 昭.47年 125～127頁
- (19) Lekerkerker C.; Geografische begrippen en de benoeming der hemelstreken bij de indonesische volken. (1926) koloniaal Tijdschrift 15. Jaargang pp.401-412
- (20) Kern H.; Taalkundige gegevens ter bepaling van het stamland der Maleisch-Polynesische volken, Amsterdam 1889 同訳澁沢元則(東京外国語大学論叢所収)
- (21) Dempwolff Otto. 1938 Austronesisches Woerterverzeichnis Vergleichende Lautlehre des Austronesischen Wortschatzas vol. 1
- (22) 佐々木宏幹「魔性の文化誌」(吉田禎吾) 書評で〈海の方位。Kêlod〉も聖であると批判した。『民族学研究』vol.41-No.4 1977 筆者にもこの誤りがあった。
- (23) Swellengrebel J.L.; Kerk en Tempel op Bali. 1948 pp.34-35
- (24) Grader C.J.; Tweedeeling in het Oud-Balische Dorp. 1937 pp.46-47 <Medeelingen van de Kirt ya Lieftrinck-van der Tuuk aflev. 5 Singaradja-Solo>
- (25) Denpasar 近くの海岸の Desa Sanur では海亀を食べる (Sdr. Manu 氏(28才)談) これはバリ島では珍しいことである。
- (26) Grader C.J. op.cit. pp.45-48
- (27) 岡千曲訳「試合組, 双分組織と方位観」『神話・社会・世界観』大林編所収昭.47年角川書店 (Adolf E. Jensen; Wettkampf-Parteien, Zweiklassen-Systeme und geographische Orientierung 1947)
- (28) 合田濤「ボントック・イゴロット族の方位観覚書」『社会人類学年報』vol.2 1976
- (29) Schärer H. Die Gottesidee der Ngadju Dajak in Süd-Borneo. Leiden E.J.Brill. 英訳 by Rodney Needham; Ngaju Religion. The Conception of God among a South Barneo People. M.Nijhoff. 1963 pp. 12-15など。
- (30) バリ島 Terunyan 村と Sembiran 村に風葬が報告されていたがその方法は異っていた。Terunyan 村の風葬地は2つの谷間を既婚者, 未婚者に分けて風葬し, 事故死, 悪病死した人は村の Kêlod-Kauh のはづれに土葬した。
- (31) Roger Y.D.T.; The Domestic Architecture of South Bali. B.K.I. 123 4e aflev. 1967 p.452
- (32) 「家は暑くて寝るところでなく, 私たちはいつも庭に寝ました。だから星の知識に詳しいのです。日本に来て屋内に寝ますから星のことも忘れていきます。家はただ雨降る時に入っています。」Lakshmi Dahar Malaviya (大阪外語大ヒンディ語外国人講師談。昭52年7月22日夜) バリ島は独特の庭の機能がみられる。
- (33) Roger Y.D.T. op.cit. p. 465
- (34) Covarrubias M.; Island of Bali, 1937 p. 88 新明・首藤共訳: バリ島 産業経済社昭.18年 53頁
- (35) Roger Y.D.T. op. cit. pp. 453-455